



# 緊急にして永遠の課題——人材の育成

研究所長

七戸 長生

周知のように北海道農業は、稲作、畑作、酪農・畜産の三本柱の上に成り立っているが、そのいずれもが本年度からいよいよ本格化するガット・ウルグアイ・ラウンドの農業合意に基づき自由化の進展によって、全く予断を許さぬ局面を迎えることになった。端的に言えば、道産品は販路を失ってしまうのではないかと、不安が濃厚である。そのため、何とかしてその打撃を軽減できないか、そのための有効な施策を早急に講じてほしいという声があることに出されている。しかし率直に言って、事態は極めて深刻であつて、従来通りの受け身の姿勢では存亡の危機に瀕しているといわざるをえない。

そこで腹をくくつてよく考えてみれば、自由化が進むからといって北海道農業の産業としての基盤、とりわけ重要な農地という資源基盤が崩壊したり、枯渇したりするわけでは決していない。また、この農地を使つて生産される農畜産物に対する需要が消滅したわけでもない。世界中からさまざまな農畜産物を大量に引き寄せるほどの旺盛な購買市場が存在しているからである。もしそうだとすると、問題は、このかけがえのない北海道の農地資源を有効・適切に利用して、この旺盛な消費力を持った購買市場に向けて、そのニーズに適合した農畜産物を供給できるように、既存の農業の生産から消費に至る全過程の、どこを、どのように変

革していくか、という点にかかっている。これが、産業としての北海道農業の生き残りの基本線となる。幸いにして北海道の農地の多くは、碁盤の目のような区画になっており、土地基盤もかなり整備されている。また近年の輸送網の整備ぶりも目覚ましいものがある。したがって生産から消費に至る全過程を思い切つて合理化していくのに不足しているのは唯一点、資源と市場を結びつける産業活動の中心的な担い手となる人材の養成と組織化の問題である。

もともと北海道の農家は、府県の農家に比べて経営規模が大きく、企業的性格が強い専業農家層によつて占められている。しかしながら今後の農業の担い手となるべき人材の養成・確保という点では、零細で自給的な性格が強く極端に兼業化が進んでいる府県農業のそれと大差がなかった。もっぱら「工を単位にして」親父の背中」で教育するという古めかしい在り方が踏襲されてきたのであった。これでは、前述のような重大な時機に際しても、守りの姿勢を脱することができないのも無理からぬことであろう。同時に、このような旧来の人材養成の在り方が、いかに現代の産業社会に

適合していないかは、到る所で現れている後継者不足、担い手老齢化の動向に如実に示されているといつてよい。

もしそうだとしたら、いま最も急がなければならぬのは、今後の地域農業の中心的な担い手となる人材の養成・確保とその組織化に着手することである。そのためには広く地域農業を見渡して、その生産から消費に至る全過程の変革を押し進めていく担い手として若者達を位置づけ、高度の農業技術の学習はもとより、各種の組織的な活動を積み重ねて近代的な経営能力を錬磨することが重要である。農業合意関連対策大綱として相当額の予算が計上されているが、そのうちのかなりの部分が集中的に投入されるべきであるのは、まさにこのような地域農業を中心的に担う人材の養成・確保と組織化に関連する部分でなければならぬ。

近年、地域農業の振興計画に関連するニーズが大いに高まって、私達の研究所も大車輪で協力しているが、実はその究極の課題も、地元の関係機関ならびに担い手農業者の人材養成と組織化をいかに進めるかという一点に集約されるのである。